

大学生の性格類型と精神健康度についての研究

中山 勝 廣 (本学助教授)
 藤 江 学 (桐蔭横浜大学)
 吉 鷹 幸 春 (桐蔭横浜大学)
 星 野 隆 助 (明治大学)
 鈴木 敬 三 (専修大学)
 外 村 近 (創価大学)
 渡 辺 隆 嗣 (産能大学)

Research on The Personality Type and Mental Health Pattern about Students

NAKAYAMA Katsuhiro, FUJIE Manabu, YOSHITAKA Yukiharu

HOSHINO Ryusuke, SUZUKI Keizo, HOKAMURA Tikashi

WATANABE Takashi

1. はじめに

大学生を対象としたクレペリン精神検査に関する先行研究には、渡部ら^{14) 15) 16)}の運動部所属選手を対象にしたもの、藤江ら⁸⁾・星野ら^{9) 10)}および渡辺ら^{11) 12) 13)}の一般学生を対象にしたものをはじめ、これまでに数多く見られる。^{1) 6) 7)}

これらの先行研究は、ある特定のグループ（例えばサッカー選手やラグビー選手あるいは〇〇大学の在学生等）に所属している学生の性格特性を、技術面の到達程度やポジション適性といった面から分析検討したり、所属学部生の特徴を推し量り今後の指導に役立てようとしているものである。

本研究は筆者らグループが長年継続的に行ってきた調査研究より得られたデーターを基に集計し、一般大学生の性格類型および特徴や精神健康度の差異と、学校や学部の種別毎に現れる特徴を明らかにしようとしたものである。

またこれらを藤江らによる中学生の調査集計や呉万福氏調査⁵⁾による台湾の大学生値とも比較を試みた。

2. 研究方法

1) 対象

筆者らがそれぞれに所属・関係する大学の学生 5093 名とした。

2) 調査項目

内田クレペリン精神検査と、判定に際しより心理状況を詳しく判断できる資料として Y・G 性格検査および各人の「自分を語る」とした記述文を添付させた。

3) 判定

小林による「性格 10 類型」の判定分類基準に従い、東京心理技術研究会が行った。

同時に被検者が自ら筆記した「自分を語る」を基に文面内容から、被検者の性格類型を推し量ることが出来たことにより、より適切に判別できたことと思われる。

3. 結果と考察

1) クレペリン検査の概要

連続加算作業を行わせることによる作業心理の研究成果はドイツの精神医学者 E・クレペリン (Emil Kraepelin 1856-1926) によって「精神作業研究」(1902) に精神作業素質検査として発表された。我が国では 1924 年、内田勇三郎 (1894-1966) がクレペリンの連続加算法にヒントを得て内田法 (内田・クレペリン精神作業検査) を考案し、これが急速に発展して現在に至っている。

検査結果は、心理活動の調和・均衡がよく保たれていて、種々の行動場面でその場面に相応しい適切な行動を示すことができる人の検査結果曲線「定型」(正しくは健康者常態定型とよばれる)とされ、「定型」・「非定型」の判定がなされる。

定型・非定型の区別は次の 3 点が評価ポイントとして行われる。

1. 全体の作業量の水準 (作業量)
2. 曲線の型 (曲線型)
3. 誤りの量や現れ方 (誤り)

この判定基準は今も使用されてはいるが、内田の課題としていた「この検査の最終目的は、曲線型を見てどういう人間かをずばり診断することである」ということを確立したのが小林晃夫による「人間の理解」²⁾ (1971) である。

内田による判定は第 2 系列の見方と呼ばれ、作業量の善し悪し、仕事の仕振り (作業態度)、その人の健全さを中心に見るもので、小林のものは第 1 系列の見方といわれて、その人の人柄を見る見方である。

我々は第 1 系列の見方から得られた結果を人柄類型とし、第 2 系列の見方から得られた結果を精神健康度として研究を進めて行くこととした。

小林によると、「人柄の見方は、十人十色と言われるほど様々である。しかし、人柄と人間の諸現象とを関連させて見るような場合には、一人一人の人間の数だけ人柄があると考えたのでは実際問題として収拾がつかなくなるのは当然である。そこで、他の学問分野でもやっているのと同様に、似たもの同士を集めて、これをいくつかの類型に選り分ける事が必要となる。」ここで選り分けられたものが性格類型と呼ばれているものである。この様な状況の中で小林は、「固有の曲線型の数だけ人柄の類型がある」とし20数年の研究の結果、性格10類型を見いだしている。我々もその10類型を用いて性格の判定を行った。

また、精神健康度は、その程度によって、高度、中等度、低度の三段階に分類されているが、その具体的内容を小林は次のように説明している。³⁾

精神健康度が高度であるということは、集団生活によくとけこみ協調的である、学習も積極的に勤勉である、ものの考え方が一方的に偏り固執することなく柔軟である、情緒的にも安定しいて喜怒哀楽の表現も率直であり激情にはしることがない、意志も粘り強く恒常的であるといった特徴がみられ、このように人柄の基本的な面が好ましいと思われる方向に現れてくる。

一方、精神健康度が低度になってくると、自己中心的、孤独、社会慣習に従わない、学業も怠ける、ごまかす、考え方が偏って固執する、情緒的にも不安定でいらいるする、つまらないことを気に病んだり、無気力、消極的になりやすいといった好ましくないと思われる面がでてくる。

そして、中等度であるということは、この両者の中間的な存在であって、高度が示するような積極的な特徴もなければ、低度が示するような特徴もなく、一般的にいて、穏やかなきわめて普通の学生像を意味する。とまとめられている。

今日性格類型は、その性格の精神が健康なとき（素質的）と不健康なとき（環境的）とに分けて行われることが常識とされているが、これまでに述べた小林による性格10類型と精神的特徴の関連を表したものが表1である。

2) 性格類型

5093名分のクレペリン検査の結果を、上記小林による分類法を用いて集計・分類したものが表2（2-1, -2, -3）及び図1・図2である。

表2及び図1より今回調査した学生群では分裂型が21.7%と最も多く、次いで粘着型が17.7%, 地道粘り型14.4%の順であり、逆に強気敢行型0.8%, あっさり実行型0.7%や自己顕示型0.6%でありほとんど見られないといってよい。この集団傾向は先行研究の藤江らが調査報告したものとほぼ同様な傾向を示している。

分裂型の人柄特徴は どちらかといえば人嫌いで、自らを閉してこもる方であり、人間以外の動植物、天文、古典、技術、芸術等に目が向く。選択制が強く、気の向いたことにはむきになって熱中し、凝り性で間口は狭いが奥行きが深い。理論的、形式的で抽象的な理論家

であり、また、現実を離れて理想家でもあるので、現状打破的な考え方をします。感情は内にもって表に現れないので、何を考えているのかわかりにくい。意志は自分で選択したことには強いが、そうでないことには無関心である。一見して変わり者でもあるし、また冷静な学者肌、あるいは孤高の社会改革家、あるいは世捨て人などが含まれる。不健康になると雑多な問題行動が出てくるが、黙り屋、冷淡、自己中心、孤独、得手勝手、忘れもの、うかつ等が目につくとされている。

地道粘り型は、人に馴れるのには時間がかかるが、一度交わると長く深い。適応は遅いが、こつこつと粘って確実な仕事をする。筋道をよく通す方で、簡単に妥協したり同調することはない。感情は内にもって、表出しない。むっつりとした感じである。意志は粘り強い。不健康になると、強情、偏屈、へそ曲がり、頑固などになってくる。

表 2 性格類型の分布

表 2-1 類型

対照群		おだやか	神経質	朗らか	じっくり	温 和	強気敢行	地道粘り	あっさり	内的安定	分 裂	自己顕示	粘 着	総 数
教育系学部	数	8	1	3	8	9	0	7	1	0	2	0	4	43
	%	18.6	2.3	7.0	18.6	20.9		16.3	2.3		4.7		9.3	
文 学 部	数	25	9	2	44	35	3	24	1	16	88	6	45	298
	%	8.4	3.0	0.7	14.8	11.7	1.0	8.1	0.3	5.4	29.5	2.0	15.1	
法 学 部	数	5	2	5	6	13	1	13	3	9	30	0	21	108
	%	4.6	1.9	4.6	5.6	12.0	0.9	12.0	2.8	8.3	27.8		19.4	
経済系学部	数	74	20	12	138	78	4	72	14	30	126	12	135	715
	%	10.3	2.8	1.7	19.3	10.9	0.6	10.1	2.0	4.2	17.6	1.7	18.9	
工 学 部	数	28	11	14	68	69	1	67	6	27	156	10	97	554
	%	5.1	2.0	2.5	12.3	12.5	0.2	12.1	1.1	4.9	28.2	1.8	17.5	
T 大 学	数	277	47	13	112	183	2	381	12	226	522	3	395	2,173
	%	12.7	2.2	0.6	5.2	8.4	0.1	17.5	0.6	10.4	24.0	0.1	18.2	
S 大 学	数	170	7	32	137	143	32	171	1	121	182	0	206	1,202
	%	14.1	0.6	2.7	11.4	11.9	2.7	14.2	0.1	10.1	15.1		17.1	
総 計	数	587	97	81	513	530	43	735	38	429	1,106	31	903	5,093
	%	11.5	1.9	1.6	10.1	10.4	0.8	14.4	0.7	8.4	21.7	0.6	17.7	

表 2-2

対照群		おだやか	神経質	朗らか	じっくり	温 和	強気敢行	地道粘り	あっさり	内的安定	分 裂	自己顕示	粘 着	総 数
台湾学生	数	113	33	14	100	94	7	89	10	50	177	11	183	881
	%	12.8	3.7	1.6	11.4	10.7	0.8	10.1	1.1	5.7	20.1	1.2	20.8	

表 2-3

対照群		おだやか	神経質	朗らか	じっくり	温 和	強気敢行	地道粘り	あっさり	内的安定	分 裂	自己顕示	粘 着	総 数
高 専	数	6	3	2	23	8	1	16	2	5	69	0	35	170
	%	3.5	1.8	1.2	13.5	4.7	0.6	9.4	1.2	2.9	40.6		20.6	
理工系学生	数	305	58	27	180	252	3	448	18	253	678	13	492	2,727
	%	11.2	2.1	1.0	6.6	9.2	0.1	16.4	0.7	9.3	24.9	0.5	18.0	

図1 性格10類型の分布 (学部・学系別)

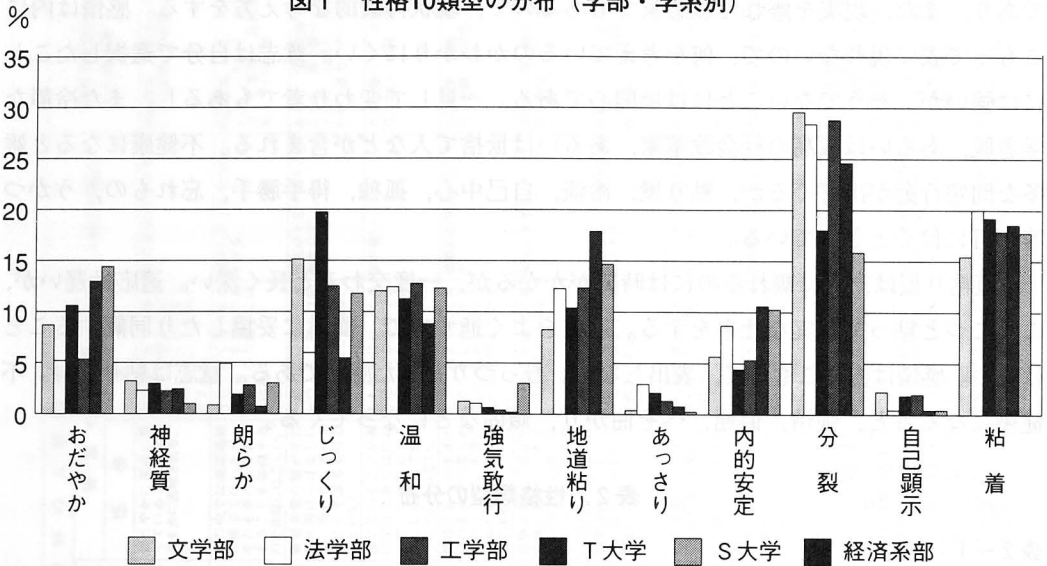
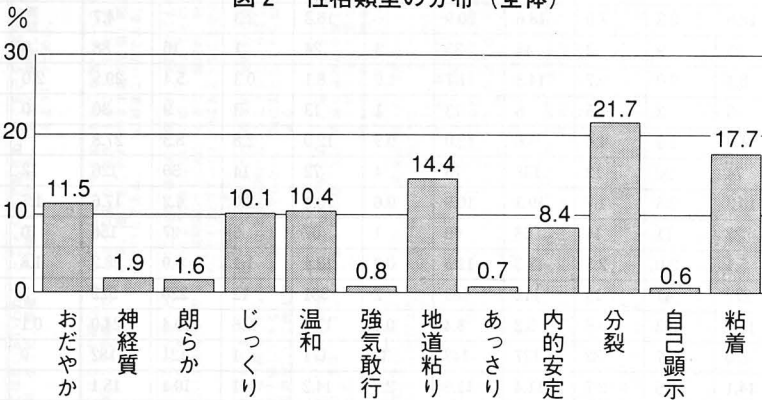


図2 性格類型の分布 (全体)



粘着型は、人に馴れるのに時間がかかり交友範囲も狭い。きまじめ、几帳面で緻密、精細なことをこつこつと粘り強くなし遂げる。筋道を通す方であるが固執性が強く頭の転換には手間どる。感情は内にこもる。意志は強い。一見くそまじめといった感じである。不健康になると固執性が表立ってきて頑固、強情、短気などのが出てくる。

つまり、社交的なことは得意ではなく、筋道を通した理論家集団で、柔軟な考え方は不得意で、気の向いたことに熱中するといった傾向が伺える。したがって真面目、几帳面さがあり、慎重に粘り強くこつこつと成し遂げるが、頑固で自己中心的な面もみられるといった特徴を持つといえる。

表2-1は、調査対照群を専門的に志向するまとまり(学部・学系別)ごとに特徴を見つけだそうとしたものである。以下に学生群の集計結果と人柄特徴を列記してみる。

教育学系学生群は調査対象学生数が極めて少ないが、なかでも温和型が20.9%と最も多く、次

いで穏やか型とじっくり型が共に18.6%であり、地道粘り型が16.3%に順であった。この群の最も特徴的なことは、後に述べる他の群で多く見られる様な分裂型や粘着型がほとんど見られないということである。

小林によると、温和型と穏やか型とは本質的には異なるが外見的には類似している。すなわち、健康であるときは人当たりが柔らかく誰とでも親しみ強調性をもち、率直、温和、忠実勤勉に着実な仕事をする。現実肯定的で、順応性があり、喜怒哀楽の情を率直に表現する。意志は強い方ではなく気力不足になりがちな類型である。不健康になると、気力不足、消極的、悲観的傾向が増す。

じっくり型の特徴は、人に馴れるのに手間どるが、人当たりは柔らかい。仕事への対応は早くはないが、じっくりと腰を落ち着けて、確実、慎重で粘りづよい。

ものの考え方は現実的で实际的であることを基調とするが、筋道を通してから実行に移す。感情の表現は押さえられがちであるが、内では協調性や共感性をもっている。意志は粘りづよい。不健康になると憂鬱、悲観的、神経症的になったり、片意地、偏屈、強情、頑固といった特徴を示す。とされており、この集団は素直でおとなしく、人当たりもよく、中には出足は重いが、確実慎重な仕事をする者も含まれるようである。

文学系学生群では分裂型が飛び抜けて最も多く29.5%、次いで粘着型15.1%、じっくり型14.8%の順に発現しており、あっさり実行型や朗らか型、強気敢行型はほとんど見られない。

法学部系に属する学生群も分裂型が最も多く27.8%、次いで粘着型19.4%の順であった。

分裂型の特徴は、どちらかといえば人嫌いで、自分の殻にこもるほうであり、人間以外の動植物、天文、古典、技術、芸術等に目が向く。選択制が強く、気の向いたことにはムキになって熱中し、凝り性で間口は狭いが奥行きが深い。理論的、形式的で抽象的な理論家であり、また、現実を離れて理想家でもあるので、現状打破的な考え方をする。感情は内にこもって表に現れないので、何を考えているのかわかりにくい。意志は自分で選択したことには強いが、そうでないことには無関心である。一見して変わり者でもあるし、また冷静な学者肌、あるいは孤高の社会改革家、あるいは世捨て人などが含まれる。

不健康になると雑多な問題行動が出てくるが、黙り屋、冷淡、自己中心、孤独、得手勝手、忘れ物、うっかり等が目につく。

従って、文学系および法学部学生の特徴は、一つの分野には飛び抜けて能力を発揮する反面、自分勝手な行動に見られがちである。気の向くことについては時間を忘れて集中するが、気が向かなければ見向きもせず、関心も示さない。さらに、こつこつと仕事をやり通すような粘り強さも備えているといえる。

経済系学部には所属する学生群の特徴はじっくり型が19.3%、粘着型18.9%、分裂型17.6%の順であった。

各類型の特徴は前述したとおりであるが、物への取りつきは遅く、エンジンのかかりが悪く、出足が鈍い。気が向いたりやり始めれば粘り強くやり通すと思われる。経済系学部では

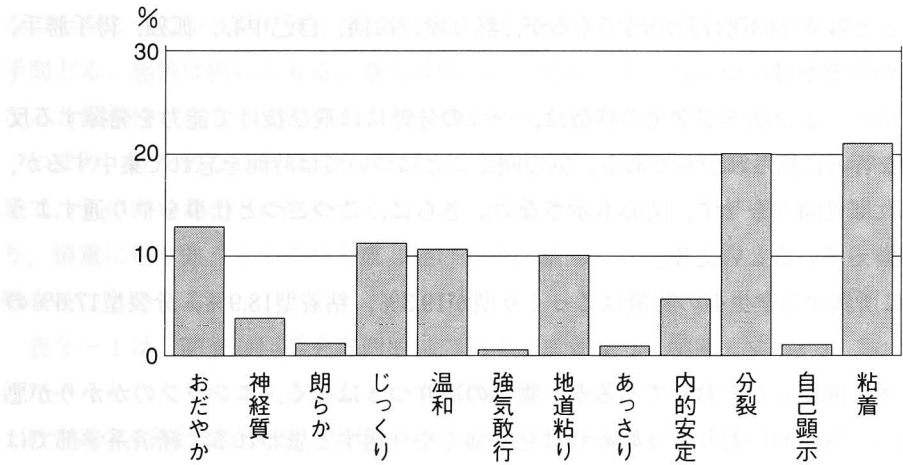
とりたてて挙げるべき特徴は見られない。あえていえば平均的分布であるということであろう。
理系学生群は分裂型が飛び抜けて多く24.9%，次いで粘着型18.0%，以下地道粘り型16.4%の順である。

分裂型の性格特徴については再三述べてきたので、重複は避けるが、何といっても現実的人間のしがらみを不得意とする性格傾向、論理的思考態度はどうしても理数的、合理的な理学系の学問分野に目が向くものと考えられる。それと技術偏重とか、偏屈もの、懲り屋などと変人奇人呼ばわりされるような人の中に意外と優れた独特な技術を備えた職人や技術者がいるものだが、その多くは分裂型の性格に属すると思われる人である。技術といえばスポーツもその中にはいるが、いわゆる超一流といわれる選手の中で分裂型の占める割合が非常に高いことはこれまで発表された幾多の研究でも明らかな事実である。それらに共通することは独創的、個性的、俊敏な技術であり、人付き合いが悪い、物怖じしないマイペースといった社会性に乏しいといった面を持っている。それはまさに分裂型の性格特徴そのものであり、それこそ職人気質、名人気質といわれるところのものであろう。理学という学問から見て、創造性、独創性、合理性といったものに加え、こつこつと飽きずに集中できる集中心があるということが必要条件の一つと考えられるが、その点から見ても関心が理学系に向く限り分裂型は適性を持った性格類型の一つと考えることができる。

今回比較対象基準となったS大学は主に経済系学部が中心であり、性格類型の分布は粘着型が最も多く17.1%，次いで分裂型15.1%，地道粘り型14.2%，おだやか型14.1%の順である。他の経済系学部と比べ、性格類型の分布は地道粘り型、おだやか型の出現が見られるが、全体としては前述の経済系学部と似ている傾向である。

表2－2及び図3は呉万福氏調査の台湾学生との比較を試みたものであり、今回調査対象学生群も大きく理系・文系とに集約しての比較である。(参考に藤江らの調査によるS大学・T大とも比較検討した)

図3 台湾学生の性格類型分布



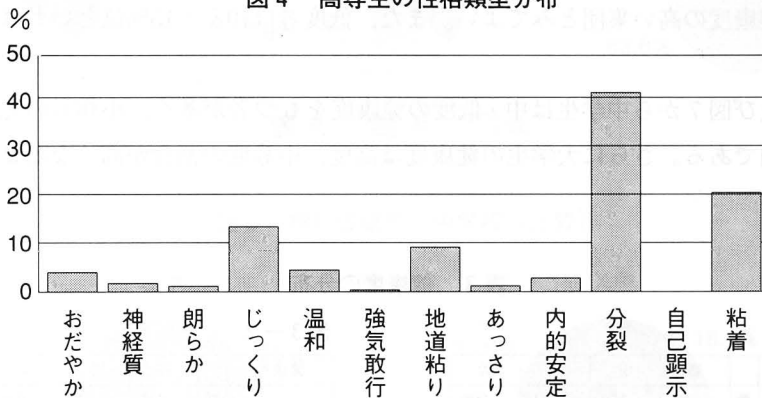
各学生群に共通していることは分裂型が最も多く、次いで粘着型、の順であるが、S大学だけは粘着型が最も多く次いで分裂型の順であった。

また、第3位の発現率の違いは、理工系群は粘着型が、文系群はじっくり型、台湾学生群はおだやか型であり、S大学は粘着型とおだやか型がほぼ同率であった。

各性格類型の分布の違いが各大学生の特徴や雰囲気を表していると考えられる。

次に理工系学生群と同じ理系の高等専門学校学生の性格類型分布を比較したものが表2-3及び図4である。高等専門学校学生では分裂型が40.6%と桁違いに多く発現していることが特徴である。高等専門学校学生は、入学当初から専門的に理工科系科目を掘り下げて学ぼうとする分裂型特有の強い意欲の現れと捉えることができよう。

図4 高専生の性格類型分布



3) 精神健康度

精神健康度はその程度によって、高度、中等度、低度の三段階に分類されているが、その具体的内容を小林は、次のように説明している。

精神健康度が高度であるということは、集団生活によくとけ込み協調的である、学習にも積極的で勤勉である、ものの考え方が一方に偏り固執することなく柔軟である、情緒的にも安定していて喜怒哀楽の表現も率直であり激情に走ることがない、意志も粘り強く恒常的であるといった特徴がみられ、このように人柄に基本的な面が好ましいと思われる方向に現れてくる。

一方、精神健康度が低度になると、自己中心的、孤独、社会慣習に従わない、学業も怠ける、ごまかす、考え方が偏って固執する、情緒的にも不安定でいらいる、つまらないことを気に病んだり、無気力、消極的になりやすいといった好ましくないと思われる面が出てくる。

そして、中等度であるということは、この両者の中間的存在であって、高度が示すような積極的な良好な特徴もなければ、低度が示すような特徴もなく、一般的にいて、おだやかな極めて普通の学生像を意味する。

表3-1及び図5は精神健康度について上記学系別に集計したものである。
いずれの群も健康度は低度が少なく中・高度に集中している。しかし、文系学群の低度者が20.5%を占めていることにこの集団としての特徴が現れているものと推察される。また、教育学系学群のデーター数が他の集団に比べ極端に少ないので、一概に論じることは危険であるが、高度に属するものが多い傾向であった。

参考までに藤江等の調査した中学校2校のデーターと比較すると、大きな傾向の違いがはっきりと伺われる。(表3-2参考及び図6)

小林によれば、「一般的に中学校生徒の場合、精神健康度の高度者が全体の20%前後が普通であって、高校、大学と選抜を体験し、より高度な同質レベルの集団になるにしたがって、その割合が増えて当然であるが、だいたい30%前後であって、30%を越える高度者を有する集団は、一応健康度の高い集団とみてよい。また、低度者は10%～15%位といわれている。」としている。

表3-3及び図7から中学生は中・低度の健康度をもつ者が多く、小林らの先行研究の示す通りの傾向である。さらに大学生の健康度は高度、中等度の割合が高くなることが明らかとなった。

表 3 健康度の分布

表 3-1

健康度		高	中	低	数
文 学 部	数	85	152	61	298
	%	28.5	51.0	20.5	
法 学 部	数	52	43	13	108
	%	48.1	39.8	12.0	
経済系学部	数	938	1,801	217	2,956
	%	31.7	60.9	7.3	
理工学部	数	968	1,530	229	2,727
	%	35.5	56.1	8.4	
総 計	数	2,043	3,526	520	6,089
	%	33.6	57.9	8.5	

表 3-2

健康度		高	中	低	数
K 中	数	415	590	641	1,646
	%	25.2	35.8	38.9	
X 中	数	126	314	258	698
	%	18.1	45.0	37.0	
総 計	数	541	904	899	2,344
	%	23.1	38.6	38.4	

表 3-3

健康度		高	中	低	数
大 学 生	数	2,043	3,526	520	6,089
	%	33.6	57.9	8.5	
中 学 生	数	541	904	899	2,344
	%	23.1	38.6	38.4	

図5 精神健康度の比較（学部・学系別）

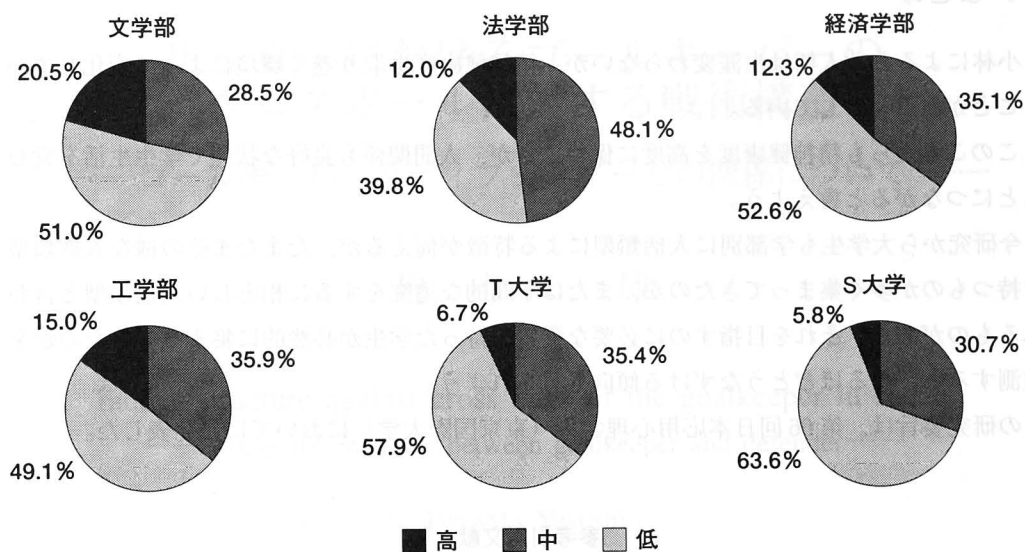


図6 精神健康度（中学校の比較）

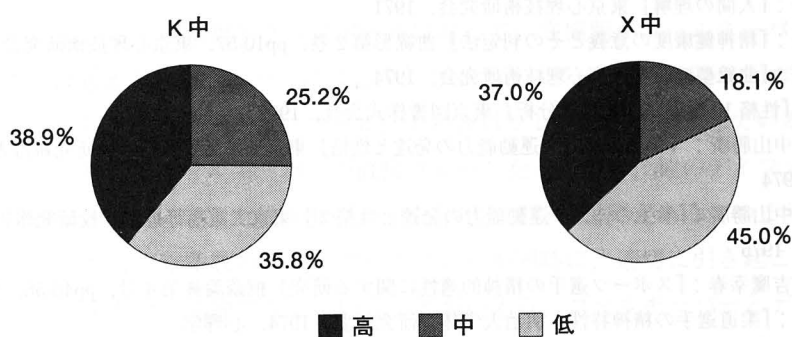
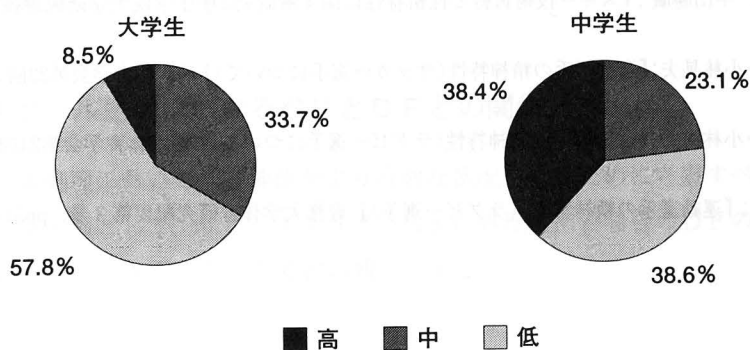


図7 精神健康度の比較（大学生と中学生）



4. まとめ

小林によると「人柄は生涯変わらないが、精神健康度は取り巻く環境によって変化していくことがある」としている。

このことから精神健康度を高度に保つことが、人間関係も良好な状態で学生生活を営むことにつながると言えよう。

今研究から大学生も学部別に人柄類型による特徴が伺えるが、たまたまその様な人柄類型を持つものが多く集まってきたのか、または学問的な追究をするに相応しい人柄類型と言われるものがあり、それを目指すのに必要な資質を持った学生が必然的に集まってきたのかを推測すると、なるほどとうなずける傾向も見られよう。

この研究要旨は、第66回日本応用心理学会（東京国際大学）において口頭発表した。

参考文献

- 1) 明石正和・平田聡, 他:『バレーボール選手の精神的変化に関する研究』日本体育学会第24回大会号, p344, 1973
- 2) 小林晃夫:『人間の理解』東京心理技術研究会, 1971
- 3) 小林晃夫:『精神健康度の意義とその判定法』曲線形第2巻, pp10-57, 東京心理技術研究会, 1976
- 4) 小林晃夫:『曲線型の話』東京心理技術研究会, 1974
- 5) 小林晋:『性格10類型による自己分析』東京図書株式会社, 1999
- 6) 武信武・中山勝廣:『学生の体力・運動能力の発達と性格』東京工業高等専門学校研究報告書第6号, pp67-73, 1974
- 7) 武信武・中山勝廣:『学生の体力・運動能力の発達と性格(2)』東京工業高等専門学校研究報告書第7号 pp123-126, 1975
- 8) 藤江学・吉鷹幸春:『スポーツ選手の精神的適性に関する研究』桐蔭論叢第4号, pp46-56, 1997
- 9) 星野隆助:『柔道選手の精神特性』明治大学体育研究紀要, 1974, 心理学
- 10) 星野隆助・長谷川宏一:『大学学生の性格特徴に関する研究』明治大学教養論集117号, pp133-161, 1978
- 11) 渡辺隆嗣:『運動選手の精神特性』工学院大学研究論叢第13号, pp45-60, 1975
- 12) 渡辺隆嗣・中山勝廣:『スキー技術習得と性格特性に関する研究』工学院大学研究論叢第17号, pp209-228, 1979
- 13) 渡辺隆嗣・中山勝廣:『スキー技術習得と性格特性に関する研究(2)』工学院大学研究論叢第18号 pp273-286, 1980
- 14) 渡部岑生・小林晃夫:『運動選手の精神特性(サッカー選手について)』日本体育学会第22回大会号, p122, 1971
- 15) 渡部岑生・小林晃夫:『運動選手の精神特性(ラグビー選手について)』日本体育学会第24回大会号, p84, 1973
- 16) 渡部岑生:『運動選手の精神特性(ラグビー選手)』専修大学体育研究紀要第3号, pp51-66, 1974